

## 離島活性化の取組み

## － 長崎市池島町 －

## はじめに

地方では人口減少・少子高齢化が加速度的に進行しており、そのような状況に歯止めをかけるべく、近年いわゆる“地域おこし”が全国各地で盛んに行われてきている。特に離島の状況は厳しく、他地域より一層工夫を凝らした地域おこしが求められている。

本稿では炭鉱閉山後、人口が激減し過疎化が急激に進行している長崎市池島町の地域振興の状況と今後のあり方についてまとめた。

## I. 池島の概要

## 1. 歴史

長崎市池島町は、西彼杵半島約7kmの西方海上、角力灘<sup>すもうなだ</sup>に位置する東西1.5km、南北1km、周囲4km、面積0.9km<sup>2</sup>の小さな島の町で、江戸時代には海上交通監視のため小番所も設置されていた（火災で焼失）。島名の由来となっている東の浜辺にあった「鏡ヶ池」は1958年、石炭積出のため海に向かって切り開かれ、現在の池島港が形作られた。

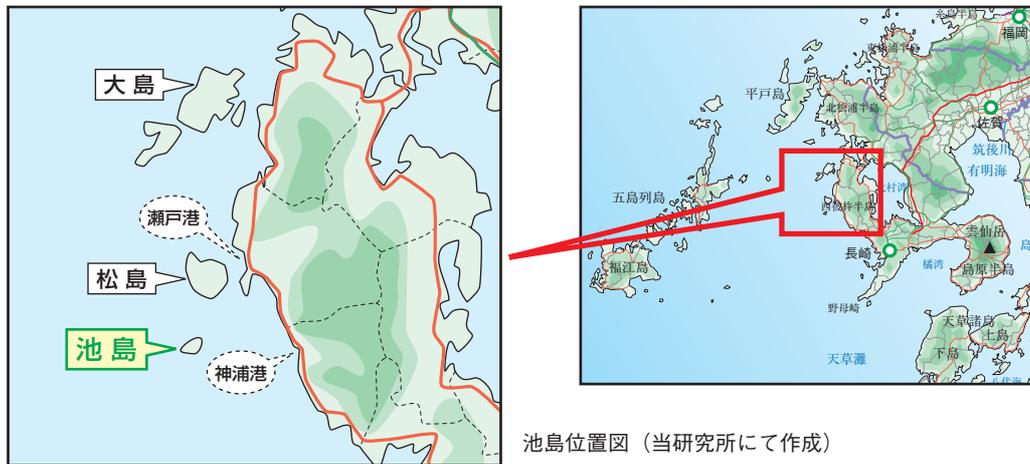
半農半漁の島であった池島が炭鉱町としての歴史を刻み始めたのは戦後のことである（図表1）。

池島の炭鉱施設を所有する三井松島産業(株)の前身・三井鉱山は、近隣の松島にあった炭鉱を買収、松島炭鉱(株)を1913年に設立し次いで35年に近隣の島、大島にて炭鉱を開坑した。その後、戦後の1947年に調査を始めたのが、近隣の島でまだ炭鉱開発が行われていなかった「池島」である。59年に営業出炭を開始したあとは発展を遂げ、島の人口も炭鉱が開発される前の350人から1970年には

図表1 池島炭坑の歴史

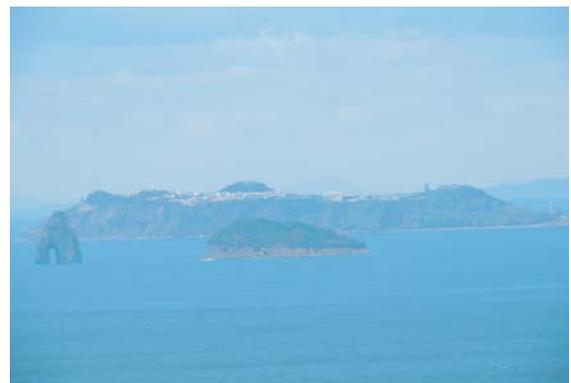
年	池島における炭鉱の歴史
1913	三井鉱山が、松島（長崎県西海市）にあった炭鉱を買収して松島炭鉱(株)を設立。
1935	松島炭鉱(株)が大島（同上）にて炭鉱を開坑
1947	松島炭鉱(株)が池島の炭鉱調査開始
1952	松島炭鉱(株)、本格的に池島における炭鉱開発に着手
1958	池島港完成
1959	松島炭鉱(株)大島鉱業所池島鉱として営業出炭開始
1962	大島鉱業所から独立して、松島炭鉱(株)池島鉱業所となる。
	}
1997	松島炭鉱(株)池島炭鉱に改称 三井松島リソース(株)設立
2001	松島炭鉱(株)が池島炭鉱を閉山

過去最高となる7,700人を突破するなど、池島はその最盛期を迎えることとなった。



池島位置図（当研究所にて作成）

ところが1987年、国が国内炭を段階的縮小するとの政策を発表したため、池島ではピークの1985年には年産150万tに達した出炭量を1989年から120万t態勢に縮小、同時に東南アジアなどから研修生を受け入れてその最先端の採炭技術を教える事業を行い、また親会社の三井松島産業(株)も海外現地法人を作り、海外での炭鉱開発に積極的に関わったりするなど、炭鉱の存続を模索していった。その後も三井松島産業(株)は、石炭コンサルタント専門会社三井松島リソース(株)を設立、松島炭鉱(株)池島炭業所を松島炭鉱(株)池島炭鉱に改称し、低価格の外国炭に対し人員削減や賃金カットなど



池島全景。遠目にも旧炭鉱アパート群が林立しているのがわかる



開坑前からある集落から第一立坑槽（上方中央）を見上げる



安全を願う女神像の後方に見える第二立坑槽

の合理化で対抗したが、ついに2001年11月、松島炭鉱(株)は池島炭鉱の閉山を決断、長崎県内はもちろ九州最後の山の灯が消えることとなった。

翌2002年、三井松島リソース(株)は長崎炭鉱技術研修センターを開設し、旧池島炭鉱の施設を利用してインドネシアやベトナムなどから研修生を受け入れて採炭技術を伝承するという国の「炭鉱技術海外移転事業」を開始。そのさなかの2005年1月、これまで池島の行政管轄であった『西彼杵郡外海町』が閉町して長崎市へ編入され、現在の『長崎市池島町』となった。

## 2. 人口

2001年の炭鉱閉山により島の経済が崩壊したため、人口は2012年9月現在、264人と最盛期（1970年の7,776人）の1/30にまで激減している（グラフ1参照）。

グラフ1 池島町の人口



※2000年は国勢調査。以降、長崎市統計データより当研究所にて作成。

## 3. 産業

### (1) 炭鉱技術の海外移転事業

三井松島リソース(株)が請け負った国の「炭鉱技術海外移転事業」は、海外から研修生を受け入れて採炭技術を取得させることを目指すものであり、その指導に当たる講師や施設の保安要員などとして、かつての池島炭鉱マン約100人の雇用を発生させた。この事業は2007年3月末まで続き、その間計400人超の海外研修生を受け入れた。

このように、炭鉱離職者の雇用と島の生活インフラを支えた国の委託事業は、その後「産炭国石炭産業高度化事業」に引き継がれて2012年3月まで行われ、2012年夏からは次の後継事業「産炭国石炭採掘・保安技術高度化事業」が行われている。

### (2) リサイクル事業

2006年9月に経済産業省が発表した「産炭地域活性化基金」（計240億円、うち本県該当分は45億円）の取り崩し認可は、国による旧産炭地への最後の支援策である。池島の炭鉱施設を所有する三井松島産業(株)はこの45億円を管理する(財)長崎県産炭地域振興財団の産炭地域新産業創造等基金を活用すべく、2007年2月に関連会社「池島アーバンマイン(株)」を設立し、当基金から10億4千万円、長崎市の企業立地奨励金約3千万円の交付を受け炭鉱敷地内にリサイクル事業施設を建設、タイヤなどが処理された後の廃自動車の破碎くずを加工し、製鋼原料や燃料として再資源化し鉄鋼メーカーなどに販売する事業を2009年に開始した。

## Ⅱ. 池島活性化の取組み

### 1. 進行する過疎化

最大の雇用の場である“炭鉱”という産業を失った池島。同じ旧産炭地で長崎市に編入された島「高島」には旧町時代の町役場があり、合併後も同所を市がそのまま行政機関「行政センター」として残したことで島内最大の雇用の場となっている。しかしながら、旧町時代にそのような機関がなかった池島には閉山後に公的雇用が発生せず、そのまま炭鉱を経営していた企業へ依存することとなった。

かくして、池島では閉山後の雇用対策として国による採炭技術の海外移転事業が進められてきたものの、近年は海外研修生の受け入れよりも日本人技術者の海外派遣に重きを置くものになってきており、三井松島リソース(株)でも主にインドネシアへの技術者派遣事業のみを行うようになったことで、その従業員数は2012年11月現在、20人弱まで減少している。

また、2009年にリサイクル事業を始めた池島アーバンマイン(株)は、翌2010年に金属スクラップなどから鉄を製造し販売する合金製造事業もスタートし、元池島炭鉱マンのほか、同年春に採用した10～20歳代の若者10人も含めた約80人を雇用していた。しかし、北京五輪や上海万博などで活気づいていた中国市場が、それら大イベントの終了後に低迷し始めたことに加えて、東日本大震災の発生により材料が入手できなくなったことなども影響し2012年7月、合金製造事業を休止して従業員65人を整理解雇、残った13人の従業員でリサイクル事業のみ縮小継続することとなった。

これらは池島に大きく影を落とし始めている。島の高齢化率は23.9%（2011年）と、長崎市全体（同25.3%）を下回り高島（50%超）とは対照的であったが、雇用の喪失に伴う若年層の流失により、残った世帯のほとんどが高齢者となることが確実視され、また前述のグラフ1の通り人口も2012年9月で264人まで減少しており、高齢化と人口減少が同時進行、今後は地域の美化作業すらままならなくなることが予想されている。

このような状況の池島を活性化させるべく、現在、民間や行政などによるさまざまな取組みが行われている。

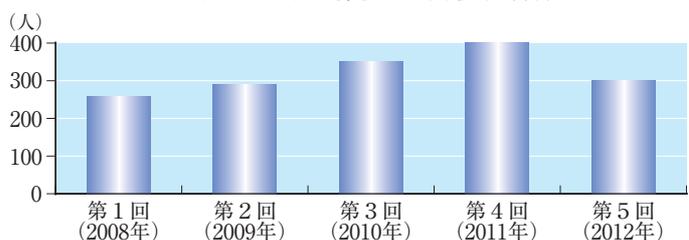
### 2. 活性化の取組み

#### (1) 地元住民の取組み

##### ◇ステップUP 池島釣り大会

元島民の里帰りと、島外の人を呼び込むために、地元住民が中心となって毎年ゴールデンウィークに近い日程で開催し

グラフ2 ステップUP池島釣り大会参加者数



※当研究所にて作成

ているイベント。始めた当初は200人台で推移していた参加者数も2011年の第4回大会には400人を超えるまでに成長している（グラフ2参照）。

※第5回大会における減少は、例年より日程がGWのさなかとなったことにも起因

## （2）地元住民と行政との取組み

### ◇ステップUP 池島まつり

閉山から10年目を迎えた2011年10月に、区切りとして島の魅力を発信しようと行政と地元住民が協力して開催した閉山10周年記念イベント。悪天候にもかかわらず2日間の開催で約1,400人が来島、炭鉱体験のため長崎市が新たに導入した25人乗りバッテリー式電動トロッコも集客に一役買った。今年も11月11日に第2回目が開催され、記念行事として大々的に開催された前年より開催日が1日少なかったものの、20年振りに来島したという元島民をはじめ、多くの来島者でにぎわった当イベントは今後も有効な集客手段として期待される。



第5回大会ポスター

～秋の池島を満喫しよう！～

# 2012「ステップUP池島まつり」日帰りバスツアー

旅行出発日：2012年 11月11日(日)

旅行代金：大人1人1,800円

1,800円

1,600円

095-823-7423

長崎国際観光コンベンション協会  
長崎県知事登録旅行業 2-143号  
〒850-0862 長崎市出島町1番1号 出島ワープ2階  
営業時間 9:00～17:30 (休業：土曜・日曜・祝日)  
総合旅行業務取扱管理者 後藤 佳彦

2012年「ステップUP池島まつり」ツアーチラシ



トロッコ電車記念乗車券。昔ながらの硬券切符としていているところがこだわり



賑わう2012「ステップUP池島まつり」

### (3) 地元企業と行政の取組み

#### ◇池島炭鉱さるく

2006年「長崎さるく博'06」が開催された際、前年に長崎市に編入されたばかりのここ池島においても本物の炭鉱坑内に元炭鉱マンの案内で一般見学者を受け入れるという体験イベント「池島海底炭鉱さるく」が三井松島リソースス株の協力のもと行われ、県内外から約100人が参加して好評を得た。

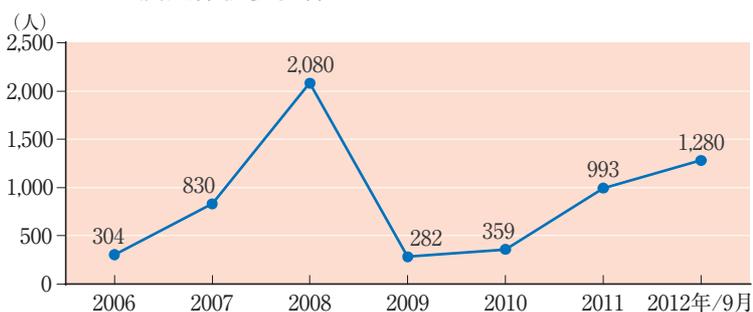
その後、同社と長崎市は体験プログラムとして「池島炭坑さるく」を開発し、継続的な観光客の誘致に取り組んだ。これは、閉山まで使用されていた1960年代のアパート社宅の1室に当時の暮らしを再現するとともに、同社宅屋上を展望台として整備、また当時の炭鉱マンが食べていた弁当を「炭鉱弁当」として再現、加えて資材運搬用の台車を改良した足こぎトロッコを配備するなどした体験機能を強化したものである。



炭 鉱 弁 当

2007年、08年と参加者数を伸ばしたが、その後はスポット的運営に移行したこともあり低迷することとなった。そこで、テコ入れ策として1回目の「ステップUP池島まつり」から三井松島リソースス株の全面協力のもと電動トロッコを導入した本格的坑内探検ツアーを開始した。この電動トロッコ導入効果は大きく、2011年度前半（4～9月期）の炭鉱体験参加者126人が、後半は867人を集客しており、2012年度前半も1,280人、10月もすでに350人超の参加者が見込まれているなど、2008年度以来となる参加者の2,000人突破が確実視されている（グラフ3参照）。

グラフ3 炭鉱体験参加者



※長崎市より聴取し当研究所にて作成

また、長崎市が2012年3月に行ったモニターツアー参加者の声のなかには「ガイドが元炭鉱マンだけに説得力がある」「ガイドの人柄がよい」「大人の私でも楽しめたので、今度は子や孫を連れてきたい」「思った以上に興奮した」などとあり、好評であった。

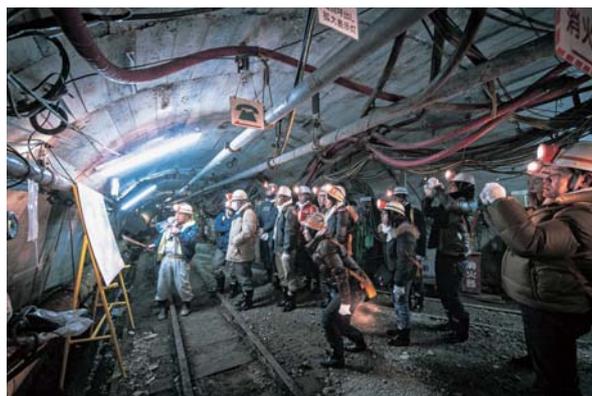
**九州最後の炭鉱 池島炭鉱さるく**  
坑内探検ツアー参加者募集!!  
～本邦初公開トロッコ電車で坑道入坑～

コース詳細(午前・午後コース内容は共通です)  
 ☆1回目(午前コース) 10時45分池島港集合→14時15分池島港解散  
 ☆2回目(午後コース) 14時15分池島港集合→15時45分池島港解散

人数	大人	中学生	小学生
1名～10名	2,500円	1,800円	2,200円
20名以上	2,200円	1,450円	2,100円

※料金に含まれないもの  
 ●入場料(炭鉱博物館) 200円  
 ●入場料(炭鉱博物館) 200円  
 ●入場料(炭鉱博物館) 200円

「池島炭鉱さるく」チラシ



坑内見学の様子

(4) 地元住民と地元企業、行政による取組み

◇池島グリーンツーリズム

2012年8月の夏休みに初の試みとして行われた炭鉱体験+島の自然・暮らし体験ツアー。炭鉱さるくに加え、初めて「ストーンアート体験」も行われた。これは、島の海岸を埋め尽くしている海底数百メートルから掘り出されたボタ（石炭採掘時に出る石炭を含まない土石。角のとれた平らなものが多い）にペインティングを行い、好みのキャラクターや置物のように仕上げるものである。また、新たに特産品として島民が開発した池島まんじゅう作りも行われた。

この試みは、イベントやさるくなどと異なり、炭鉱体験に加え、その活用が難しいボタを利用、さらに地元の「食」作りまで体験できるなど、まるごと1日池島体験となっているのが特徴である。



ストーンアートの様子



池島まんじゅう作り体験

### ◇映画「池島<sup>たんか</sup>譚歌」の製作

池島譚歌は、地元住民とのつながりから、モナコ国際映画祭での受賞経歴もある映画監督・荻野欣士郎氏が池島に来島し、島を大変気に入ったことがきっかけとなり、製作が始まった初の池島を舞台とした映画である。

ほぼ全編が池島で撮影され、地元住民の協力（もちろん出演も）をはじめ、公募による長崎市民の出演や、全国から旅行会社による出演ツアーも組まれるなど参加型の映画とされる。協賛企業には三井松島産業(株)をはじめ地元の地銀や交通会社、また後援に地元マスコミ各社、協力には長崎県や長崎市といった行政など、そのバックアップに県内の主要関係者が名を連ねている。

2012年7月にクランクイン、同年12月完成予定とされており、2013年2月には長崎市内で試写会を行う予定。また、全世界に池島をアピールすべく、カンヌ国際映画祭への正式出品をも目指しており、全国公開は2013年初夏に長崎市から順次行われる予定となっている。

## Ⅲ. さらなる活性化に向けて

現在の池島では、発展が期待されていた池島アーバンマイン(株)の事業縮小の発表が島民に大きな衝撃をもって受け止められ、若者の仕事がなくなり、働くためには島を出ざるを得ないという炭鉱閉山時と同じような状況となっている。他の産炭地域と異なり池島は離島であるためコストがかかり、その上、狭い島の土地のほとんどが炭鉱会社の所有となっていることもあり、新たに進出しようとする企業もなかなか現れない。これまでみてきたように、閉山後にもさまざまな振興策が講じられてきたが、これからも島民の生活インフラを維持していくためには、さらなる『ステップUP』が求められる。

### 1. 島へのアクセスの改善

まず考えなければならないことが、池島までのアクセスの改善であろう。現在、池島に赴くには、長崎市の神浦港から地域交通船が5往復とフェリー・高速船がそれぞれ1往復、西海市の瀬戸港からフェリー6往復と高速船が1便、佐世保市の佐世保港から高速船が2往復と、一見、本土と多様に結ばれているように見えるが、県都・長崎市の中心に最も近い神浦港の地域交通船は波が少々高いと欠航する12人乗りの小型船であり、最も不安定な航路となっている。

次に本土側それぞれの港に辿り着くまでの交通手段の不便さがあげられる。長崎市から「地域おこし協力隊」<sup>\*1</sup>として池島へ派遣されている小島健一氏<sup>\*2</sup>も「長崎駅から神浦・瀬戸両港へ向かう最も早いバスは午前10時台からしかなく、長崎市の中心部から行きにくい上に、神浦港発の船は小さく欠航しやすいことから、長崎空港から池島を目指す観光客に対しては、便数は少ない

が空港と直にバスで結ばれる佐世保を出る高速船を推奨せざるを得ない」と話している。また帰路においても、例えば夕刻の瀬戸港行きフェリーを利用した場合、長崎市内へ入るには瀬戸港到着後バスを30分待たなければならないなど、本土側の公共交通と船便とがうまく連絡していない。

閉山により船便の減少と小型化が加速、島民と訪島者双方の利便性が失われつつあるなか、本土側の公共機関と船便の連携の悪さが目立ち、それがますます人々の足を遠のかせることとなり、交流への大きな足かせとなっている。この問題については行政と交通業者が互いに知恵を出しあって解決に向かうことを期待したい。

※1：地域外の人材を地域社会の新たな担い手として受け入れ、地域力の維持・強化を図ることを目的とする総務省の取り組み。

※2：ブログ大賞を受賞するなど、メディアへの掲載多数。「社会科見学に行こう！（個人では見学しづらい工事現場、工場、研究所、産業遺産などを見学する団体）」を主宰し、書籍・WEB・TV・トークライブ・イベントなどで紹介している。アクセスや観光などをわかりやすく説明した池島のホームページを制作。

## 2. 観光事業のさらなる推進

### (1) 「産業遺産」観光の徹底推進

人口が減少する池島では、交流人口を増やして活性化を図ることが最も現実的な方法であろう。「炭鉱さるく」に代表されるような他にない地域資源「炭鉱」を生かした取組みをさらに強化していかなければならない。

産業観光のなかでも「産業遺産」の観光は見た目が美しいわけではないが、そこには人の思いが伝わるような物語があり、石見銀山の世界遺産認定や富岡製糸場の世界遺産への推薦決定などから、わが国でも一般に広く認知され始めている。

産業遺産の観光は従来の“通過型観光スタイル”とは大きく異なる“地域密着型観光”であり、その地域を知る旅となる。長崎市内の旧産炭島である「端島（軍艦島）」には廃墟ブームも重なり、年間10万人近くの人々が訪れるようになったが、端島と隣りの高島に残る炭鉱施設とその炭鉱住宅や炭鉱アパート群は、既に廃墟と化しているか撤去されており、直に触れることはできない。端島で炭鉱都市の廃墟を観て、池島では生きている炭鉱都市を体験する・・・全国初となる本物の炭鉱施設を常時一般公開している池島にとって、そこが最大の集客ポイントとなり得るだろう。

#### ■池島における産業観光の特徴は次の5つ

- ①国内で坑内掘りの施設が残っているのは、北海道・釧路とここ池島のみ。国内唯一の現役炭鉱である釧路コールマイン(株)は、当然操業も行っていることから、見学者をほとんど受け入れていない。しかし、池島では本物の坑内に入ることが可能。石炭産業の現場を体験できる国内唯一の場所。



現在の炭坑体験における入坑口



斜坑下部から写した炭坑現役時の入坑路、奥が地上入口。

- ②現役に近い状況で炭鉱作業時の施設や道具がそのまま残って（まさしく「本物」がある）おり、産業について学ぶ価値が高い。



ジブローダー  
石炭を掻き寄せてベルトコンベアに乗せる機械。実物を見ることができるのはここ池島のみ。



トリンマー  
石炭を船に積む機械。多くの旧産炭場にて撤去されるものが、ここ池島には未だ健在。

- ③小さな島のため、他の旧産炭地域と異なり立坑跡などの炭鉱施設が狭い地域に集中しており、見学しやすい。
- ④21世紀の現代に、炭鉱の作業の様子や従業員の暮らしが未だに残っている貴重な地域。他地域では既に消滅してしまった炭鉱の街がここだけに今も息づいている。まるごと「炭鉱」を実体験可能。
- ⑤今も残る炭鉱跡と無人化した炭鉱住宅。そのすぐ近くで、今も郵便局や店舗が営業しているという、遺構と日常とが併存する場所。日本の近代化の基礎を築いた石炭産業と島の盛衰とを目の前に見ることが可能。



今も島内に林立する無人炭鉱アパート群



島内に残る炭坑施設群

## (2) 長時間滞在型観光プログラムの推進

島に短時間滞在するだけの炭鉱さるくと異なり、2012年夏に初めて行われた「池島グリーンツーリズム」のような長時間の滞在につながる企画も有効といえよう。観光客に長時間滞在してもらう観光プログラムの推進は、訪れた場所を気に入ってもらい、そこに移住する人が出てくることを期待できる手法の1つである<sup>\*</sup>。今後は人口の減少が一段と進むものと予想されるなか、ここ池島でも気に入った人に住んでもらうというスタンスで観光事業を展開すべきであり、それには長時間滞在型のプログラムを複数開発・提供すべきであろう。

※：この手法を推進して成功している県内離島の事例が小値賀町である。小値賀町では島を訪れた観光客、つまり島に縁もゆかりもない人が小値賀を気に入りそのまま住み着いたという事例が数多く報告されている（ただし小値賀では宿泊プログラムが充実している）。

また、修学旅行のさらなる受け入れも長期滞在型観光の推進として有効な手段となる。さすがに現状宿泊は厳しい（次項【(5) インフラの整備】の項参照）ものの、修学旅行における池島炭鉱の見学は2003年から三井松島リソーシス(株)の受け入れ実績があり、学校側からも「炭鉱体験は全国的にも珍しく、おもしろい」「エネルギー問題を考える学習の場になる」などと好評である。2012年も年末までに関東方面を中心に、遠くは青森県などから10校近くが来島、もしくは来島予定（財長崎国際観光コンベンション協会による）であり、今後もこの修学旅行の誘致は有力な池島観光のツールとなろう。

## (3) 人材の育成

観光地には、その地域をよく知るガイドが求められており、池島では現在、三井松島リソーシス(株)の関係者が行っている炭鉱体験ガイドを元炭鉱マンの地元住民が、またその他の島内観光には島の歴史に精通している住民が活躍できる場面があるものと思われる。新たな雇用の創出という面からも、人材育成システムを構築することも必要であろう。

#### (4) 特産品やグッズなどの積極展開

石炭産業一色であった池島には、従前から特産品と呼べるものはなかったが、近年は島民の努力もあり、「池島まんじゅう」や「池島カレー」などといった土産や「食」が創造されてきている。しかし、それらは生産面の関係もあり、まだ一般の観光地のように池島まで赴けばいつでも購入でき、またいつでも食べることができる、というレベルになく、事前に予約しないと手に入らないし、体験できない。また、食関連以外にも観光地によくある



池島まんじゅう

絵ハガキやガイドブック（これは来年度完成予定とされている）の類もまだなく、ましてや「食」体験や土産を販売する常設専門店もない。池島が今後観光を主産業として捉えていくのであれば、これらをカバーする仕組みを早急につくる必要に迫られよう。先の【3. 雇用の創出】の項にあるビジネスモデルなどにおいて、外に向けた商品の情報発信や通信販売などを行うことができれば、それが島民生活の糧にもなるのではないだろうか。

#### (5) インフラの整備

池島の宿泊施設は、民間施設がなく公営の素泊まり宿「池島中央会館」しかない。しかし、このことについては観光客が島内唯一の宿泊施設に食事の提供がないことに不安を感じないように、食事の提供を島内業者間で当番制にするなど、その対策はすぐにでも可能なように思われる。

また、島内に初めて足を踏み入れることになる港の棧橋付近には、観光案内所や島内の見所を示す地図などもなく、観光客をもてなすという意味においてかなり不親切である。外客を迎え入れるにあたり環境整備を早めに行うことが求められる。

#### (6) 他地域との連携

2012年11月、福岡県大牟田市の旧三井三池炭鉱の主力坑だった三川坑が1997年の閉山後、初めて一般公開された。大牟田市もかつての石炭産業を活用したまちづくりを目指しており、池島と同じ産炭地として今後の連携を模索することも一考であろう。

### 3. 雇用の創出

島民のなかには「この島でこの先有効なビジネスが見出せないのであれば、自らが稼ぐシステム、つまり観光客の受け入れや特産品・グッズなどの開発・販売などを行う一方、島内の公的業務（道路の美化作業や公園管理、島内に残るアパートの管理や見回りなど）を行政から請け負い、

島を訪れる人と行政の両方から収入を得る会社組織のようなものを設立し、これを島民ビジネスとして確立して今後も池島で暮らしていけるようにしてはどうか」と思い描く人もいる。

この「観光客相手の仕事と同時に行政が担うような仕事を地元住民が請け負う」というビジネスモデルは、同じように過疎で悩んでいる地域にも応用可能な要素が含まれているようにも思える。

## おわりに

池島の場合、年間を通して外客が訪れる島へと変えなければ、船便の減便など、結果的に島民生活に直接影響する事態が発生することが容易に予想される。そのようななか、池島の各関係者（図表2）が月1回集い、長崎市に編入合併したスケールメリットを生かしながら、観光面を中心とした今後の方針についてお互いに話し合う連絡会議が2012年3月から始まっており、今後について積極的に模索する動きも出てきている。

しかしながら、今後の池島のあり方を占う最も重要なポイントは、200人台にまで減少した島民1人1人が地元の価値に気付き、その地域資源を利用して本気で島へ人を呼び込む気があるのかどうかにかかっているといえよう。また、国策とはいえ池島を石炭の島に変えてしまった地元企業は、島民が新しくアクションを起こす際にはこれまで以上に協力すべきであろう。

島民の間でも様々な意見が交わされているが、そこは小さな島の住民同士、かつての炭鉱街でよくみられた「地域全体が家族」という独特の一体感を再び呼び起こし、彼らを地元企業が支え、行政が強力サポートする、といった形が地域衰退の流れを食い止める唯一の方策であろう。「炭鉱」という希少な地域資源を住民と企業、行政の三位一体で活かし、人々の往来が絶えない島となることを願って止まない。

（杉本 士郎）

図表2 池島連絡会議

連絡会議メンバー	
池島	池島4地区自治会会長
	地域おこし協力隊員
	三井松島産業(株)
	三井松島リソース(株)
行政	池島アーバンマイン(株)
	長崎市地域振興課
	長崎市農業振興課
	長崎市外海行政センター (助)長崎国際観光コンベンション協会



第二立坑側にある元池島小中学校教諭が制作した親子の像